International MRA Association of Japan

# IMAJ

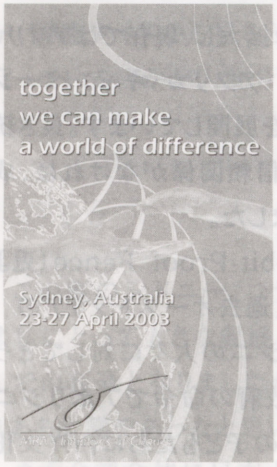
NEWS NO.102

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　2003年6月30日
発行所　(社)国際MRA日本協会
150-0031東京都渋谷区桜丘町13-9
クリエート桜丘センチュリー21 506号
TEL:03-5459-5703 FAX:03-5459-5706
E--mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　橋本　徹
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

## ◇オーストラリア・アジア・太平洋地域会議参加レポート◇

# 『力を合わせて、より良い世界を築いて行こう』




石田　寛 (社)国際MRA(IC)日本協会事務局

オーストラリア国際会議(2003年4月23～27日)は、シドニー国際空港からバスで約1時間北上した太平洋に面したすばらしいコラロイビーチ(Collaroy Beach)の近くにあるコラロイセンターで開催され、23ヶ国から250名が参加しました。

日本からは、現在MRA(IC)日本協会でICジャパン・ユースのグループの取りまとめをしている國廣昌史さん(上智大学在学中)、オーストラリアのメルボルンのアーマー(Armagh)ICセンターを通じてICの活動を知り、参加していた山田美里さんと山田祐子さん、そして事務局の私を含め4名が参加しました。

この会議の開催目的は、以下の通りです。

1. 和解のプロセスとコミュニティー構築の手法をより深化させること。
2. この地域の協力と緊密化を図るために活動する人々のネットワークを形成すること。
3. 異なる宗教、文化を持つ人々の相互理解と信頼関係の強化を図ること。

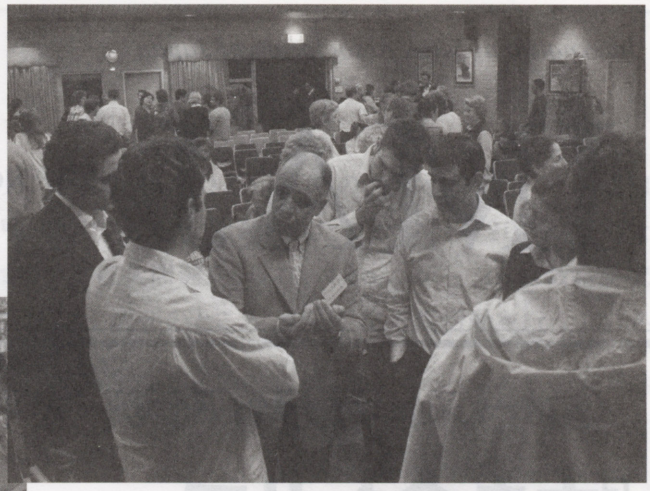
特に印象に残ったことは、以下のとおりです。

4月24日

基調講演では、元国際赤十字の総裁で現在ICコースイス財団会長のコネリオ・ソマルガ(Dr.Cornelio Sommaruga)氏が『人間の安全保障のために世界が果たすべき責任について』をテーマに以下の要旨で話しました。「人間の安全保障については、紛争、不祥事、暴力等様々な問題が対象になりますが、各個人が責任を持って活動する事が大切です。そのためにもまず身近な家庭から始めていくことが大切ではないでしょうか。そして、法律が整備され、システム化され、良い政府が統治されているところでは、IC(MRA)の4つの道徳基準(正直・純潔・無私・愛)に基づいて、安全保障を

■主な内容■

◆シドニー国際会議レポート・1-3
◆MRAからICに(総会報告)・3
◆CRT日本委員会ニュース・4-6
◆IC(MRA)と私・7
◆カンボジア農民会議レポート・8-10
◆ICワールド・ニュース・11
◆事務局便り・12



レバノン系オーストラリア人の青年に内戦での体験を語るシャフタリ氏(レバノン)

青年たちと語り合うICコー・スイス財団のソマルガ会長

実現するために次々に活動することが可能となります。

しかし、これを成し遂げるためには、これまでのような力の戦いによって恐れが消えることはないため、敵を愛する心構え、つまり『忍耐力』がなければなりません」

『平和と正義のためにコミュニティーが協力できること』

1977年にレバノンから移住して、オーストラリアに住んでいるナイム・メルヘム(Naim Melhem、元メルボルン市のダンデンオング町町長、現在も町会議員を務める)氏は、140ヶ国の出身者から成る様々な文化的背景を持つ人々によって構成されている、この町のコミュニティーにおいて、融和を実現させるためには、それぞれのコミュニティーに対して、平等に働きかけることがとても大切だと考えてきました。例えば、異なった民族が一緒に新年を祝うことにより、お互いの心を大きく開く事が出来る点も実例として挙げられました。

4月25日

『正直、信頼と良き統治』

ジョゼフ・カランジャ氏(Joseph Karanja,弁護士、ケニア)は、これまでケニアにおいて公正な選挙を実施させるための活動として選挙浄化運動(Clean Election Campaign)を行ってきました。

この活動を通じて、ある政治家の謝罪をきっかけにケニア政府における不正、腐敗そして汚職を激減させただけでなく、教育・経済等のあらゆる面で効果が次々に顕著に現れました。

当初は選挙だけを対象に活動してきましたが、その後ケニアにおける政府、企業、市民の中での不正の防止を目指したクリーン・ケニア・キャンペーン(Clean Kenya Campaign)に活動を拡大し、現在ではアフリカ全土を対象にしたクリーン・アフリカ・キャンペーン(Clean Africa Campaign)を展開しています。良き統治とは、正直な心とお互いの信頼関係がなければ、成り立たないことを力説していました。

また、同夜上映された『Rabbit-Proof Fence(兎よけのフェンス)』という映画は、過去オーストラリアの人々が、先住民であるアボリジニの人々に対してとってきた行為(オーストラリア政府の命令でアボリジニの親から子どもを引き離し、その子どもたちに西洋文化の習慣や英語を教え込む)を実話に基づいて再現させたものでした。また、実際に母親と引き離されて、1600キロも離れた収容所に収容され、そこから脱走に成功したものの、三人姉妹の内の二人だけが無事に家にたどり着いたというその長女の娘にあたるドリス・ピキントン－ガリマラ(Doris Pikington Garimara)さんもこの会議に参加されていました。ここでの教訓は、一方が相手のために『正しい』ことをしていると勝手に考えても、その相手方にとって見れば、それが受け入れることのできない行為であれば、お互いに信頼関係に亀裂が生じ、憎しみが芽生えてしまうということです。

4月26日

『過去の癒し、そして未来に向けて』

オーストラリアの近くにあるパプアニューギニア、フィジーやソロモン島の人々が壇上に立ち、過去に受けた傷をどう克服し、明るい未来に向けて何をしようとしているのか、自らの体験を踏まえて話され、大変感慨深いものでした。

最後に

この国際会議に参加して、一番心に残ったことは、オーストラリアの人々が大変熱心にIC（MRA）の活動をされていることでした。参加されている多くの方々が私利私欲からではなく、ボランティア精神に基づいて、会議を成功させるために、相当の年月をかけて準備されてきたことを身にしみて感じることができました。

また一方でICの活動が、世界的にも個人ベースで動いている部分も多く散見され、力やノウハウが分散されていることに対して、多くの関係者が危惧していたため、この会議中にもICインターナショナルのメンバーとも意見交換を行いました。

例えば、ICが国連と提携していく方向で動いていますが、国連サイドから見ると、このICがどういった活動を行っているのかが大変分かりにくい組織体制になっています。本来のICの特徴を前面に打ち出し、もっと大きな世界観をもって活動をすることが必要ではないかと考えました。その一例として、東アジアに位置している日本や韓国のICとしては、北朝鮮との紛争を防止するための手段を講じていく、イニシエーターとしての役割があるように感じています。今後この問題に関しては、日本や韓国のICだけで活動するのではなく、ICインターナショナルともタイアップして検討していくことが必要ではないかと考えています。これについては、今後韓国MRA(IC)の事務局とも連携を密に取りながら、6月のIC小田原国際会議で意見交換をしていきたいと考えています。また、今年のスイスのコーで8月10日に開催されるICインターナショナルの会議でも、このテーマに関して議論していくことになると思います。

## シドニーでの国際会議に参加して

國廣　昌史（上智大学4年生）

この度のシドニー、コラロイセンターでの国際会議は私にとって大きな収穫となりました。学校の授業を休んでの訪豪となりましたが、それを補っても余るある実りある会議であったと思います。

まず会議全体に日本人が4名しかおりませんでしたが、出会った多くの人にIC－Japanでは日韓のプロジェクトを推し進めているとアピールしていく事ができたと思います。日韓自体に関してはまだ関心の薄さを感じはしたものの、昨年来北朝鮮をめぐって緊張が高まっていることもあり、他の国の方々も興味を示していました。また当会議には23カ国からの多数の外国人の方々が参加していたので、様々な人々と出会うことができました。中でもアメリカのラフィン夫妻とは、コースカラーズ・プログラム（Caux Scholars Program）について話す機会を持つことができ、これからも連絡を取り合っていきたいと思っています。

全体を通して、この度の会議は各参加者のエネルギーで満ち溢れており、それが互いを刺激する良い材料になっていたと思います。様々な素晴らしい講演を聴きそして互いの意見を交換し、みなそれぞれ数多くのものを得て会議を終えることが出来たのではないかと思います。ICユースのメンバーとしても小田原会議をひかえこのたびの会議は非常に参考になりました。また基本的なことですが、5日間もの会議に参加できたので、IC（MRA）の理念というものをしみじみと肌で感じる事ができ、ICに対する理解をさらに深めることが出来ました。

### 国際IC日本協会への名称変更に向けて

去る平成15年3月8日にカメラ財団会議室において第38回通常総会が開催されましたが、国際MRA日本協会から国際IC（イニシアティブス・オブ・チェンジ）日本協会に名称を変えるための定款の変更が承認されました。これは、一昨年8月にスイス・コーで開かれた世界連絡調整会議で決定した、MRAからIC（イニシアティブス・オブ・チェンジ）に世界共通で名称を変更して行こうという決定に伴って行ったものです。

この総会での承認を踏まえ、監督官庁である文部科学省に申請し、去る6月25日に定款の変更の認可を得ましたので、現在、登記の変更の手続きを進めております。

時代の要請に合わせ、名称や活動の内容が変わっても、もちろん、MRAの精神は変わることなく、今後もICに引き継がれてまいりますので、今後とも皆様のお力添えのほどを宜しくお願い申し上げます。

▼▼CRT日本委員会ニュース▲▲

CRT日本委員会　最近の動向

# SAIPの日本導入に向けたプロジェクトチームを結成

石田　寛（CRT日本委員会アシスタント・コーディネーター）

## 1. SAIP

SAIP（Self-Assessment and Improvement Process：自己評価＆改善プロセス）は、米国のCRTチームが中心となって開発したもので、コー円卓会議（以下略称．CRT）で採択された「企業の行動指針」に照らして、企業としての責任ある行動の実践度合いを自己評価して、改善するためのシステムです。

SAIPの基本的な考え方は、日本側から示された「共生」の概念とヨーロッパ側から示された「人間の尊厳」の概念に根ざしています。日本から示された「共生」の理念は、人類全体の利益と幸福の実現に向けてともに生き、ともに働くという意味であり、お互いの協力、共存共栄と健全で公正な競争との両立を図ろうとするものです。

## 2. SAIP－JAPANの特徴

（1）日本独自のSAIP

米国が開発したSAIPをそのまま日本に導入するのではなく、日本の商法や企業風土にマッチした改良型のSAIPです。

（2）CRT原則をステークホルダー（企業をとりまく利害関係者）別に分析

CRTの原則に沿って、ステークホルダー別に分析を行います。企業のポリシーと実践についての意識など、49のマトリックスから275項目の質問事項によって構成されています（下図参照）。

《セルフアセスメントのフレームワーク》

| | A 一般原則 | B 顧客 | C 従業員 | D オーナー投資家 | E 仕入先 | F 競争相手 | G 地域社会 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1.企業の責任 | 1-A | 1-B | 1-C | 1-D | 1-E | 1-F | 1-G |
| 2.企業の経済的・社会的影響 | 2-A | 2-B | 2-C | 2-D | 2-E | 2-F | 2-G |
| 3.企業の行動 | 3-A | 3-B | 3-C | 3-D | 3-E | 3-F | 3-G |
| 4.ルールの尊重 | 4-A | 4-B | 4-C | 4-D | 4-E | 4-F | 4-G |
| 5.多角的貿易の支持 | 5-A | 5-B | 5-C | 5-D | 5-E | 5-F | 5-G |
| 6.環境への配慮 | 6-A | 6-B | 6-C | 6-D | 6-E | 6-F | 6-G |
| 7.違法行為等の禁止 | 7-A | 7-B | 7-C | 7-D | 7-E | 7-F | 7-G |

（3）発展性のある解答と実現可能な目標

規準は二者択一ではなく、発展性のある解答を引き出せるように設計し、分析結果が実現可能な目標として設定できるように工夫しています。

## 3. SAIP－JAPANプロジェクトに携わるメンバー（五十音順）

現在このプロジェクトに携わっているメンバーは、

稲岡　　稔　CRT日本委員会副会長　（イトーヨーカ堂常務取締役）
岸本　幸子　（パブリックリソースセンター事務局長）
佐久間　健　CRT日本委員会アドバイザー　（コミュニケーション戦略研究所主宰）
佐藤　　茂　CRT日本委員会アドバイザー　（元住友3M顧問）
須田　康司　CRT日本委員会コーディネーター　（NEC地域統括部マネージャー）
武山　健自　（イーシンコミュニケーションズ）
水尾　順一　CRT日本委員会アドバイザー　（駿河台大学教授）
三宅　博人　CRT日本委員会アドバイザー　（公認会計士）
宮田　安彦　CRT日本委員会アドバイザー　（大妻女子大学専任講師）
石田　　寛　CRT日本委員会アシスタント・コーディネーター
三田紗英子　CRT日本委員会事務局

の計11名です。

## 4. 現在の進捗状況及び今後の展開（敬称略）

2002年12月　●SAIP－JAPANプロジェクトチーム結成

2003年 2月　●CRT&SAIPのパンフレット完成（武山、石田）

●業務仕様事前検討チーム（佐久間、佐藤、三宅、石田、三田）

2003年5月　●SAIP翻訳作業終了（水尾、宮田）

2003年7月　●SAIP－JAPAN研究会（仮称）結成

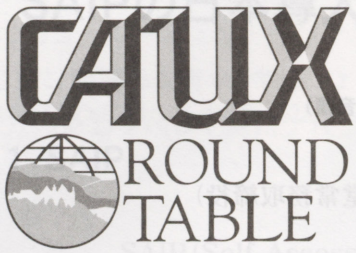
米国で開発されたSAIPを日本バージョンにするため、日本での商法改正や企業風土を考慮したものにすることを目的とするワーキングチーム。従って、このチーム構成は、弁護士・公認会計士・大学教授・企業人等を予定。

2003年　秋　●SAIP－JAPANバージョンの完成

●SAIP－JAPANの実施テスト開始

●SAIP－JAPAN記者会見

●SAIP－JAPANに関するガイドブックを出版




# 海外の動向

## CRT調査委員会

CRT調査委員会のメンバー(2000年4月設立)はCRTグローバル運営委員会(Global Governing Board)及びCRTの関係者で構成されています。主に他の団体で作成された「企業行動指針」についてレビューを行ない、CRTの一般原則の改定可否を検討するため、電話会談を毎月1回実施しています。日本からは、稲岡稔CRT日本委員会副会長、岸本幸子(パブリックリソースセンター事務局長)、石田寛、三田紗英子そしてボランティアスタッフとして美馬伯海子(会社員)が参加しています。

詳細は
http://www.cauxroundtable.org/OTHERCODES.HTMをご参照下さい

## 米国のSAIPの動向について

2002年5月から開始されたSAIPの第一次フェーズの実施テストは、2003年6月に完了し、レビュー作業を行う予定です。また、国連のグローバル・コンパクトとは、基本的な考え方で共通認識を持っていることが分かりました。現在はISOとも企業の社会的責任のツール作りで意見交換を行っています。

## メキシコのフォックス大統領との会談

2002年9月のCRTメキシコ国際会議終了直後、CRT副会長のドム・タランティーノ(Dom Tarantino)氏を代表としたCRT関係者とビンセント・フォックス(Vincente Fox)メキシコ大統領との会談が同年9月10日に行われました。この会談では、特にメキシコ政府が自国の経済成長の為には国外からの資本投資が不可欠であり、そのためにはCRTが掲げている企業倫理の考え方が自国に定着することが必要と認識されました。当会談には、国際会議に出席した日本企業を代表して伊藤忠メキシコ会社の渡邊社長が出席されました。

## ISBEEとの提携

CRTは2002年7月正式にISBEE(International Society of Business, Economics, and Ethics)と提携し、今後互いに協力し合って、企業倫理を世界に広めていくことになりました。これに伴い、チャリト・クルバント(Charito Kruvant、米国)、アリ・カハン(Ari Kahan、メキシコ)、橋本徹(日本)、稲岡稔(日本)の4氏がISBEEのビジネス諮問グループに参画することになりました。

# 私とIC（MRA）

井原伸允

西日本銀行で社員教育に従事（研修所長、人事部部長）。
その後、香蘭女子短期大学教授（秘書学科長）を経て、現在、同校非常勤講師。NPO日本交流分析協会顧問。

MRAの九州協力会ができて、世話人の一人である西日本銀行の社長の代理人出席をしていたのが始まりでした。昭和38年、新しい人、新しい国、新しい世界というテーマ（西日本新聞紹介広告）でMRAの劇が九州に持ちこまれて、銀行の研修所を宿泊所として提供したことから、メンバーの学生たちと、夜、意見交換をしたりしたのが、今思い出すと長いつきあいとなるきっかけでした。

若い学生達の「大人の世界はうそいつわりが多い」など批判をうけると、もっともだとは思いながら、現実の社会ではある程度の妥協も必要なのだよと反発したものです。

当時、私は人生観的には、京都の一燈園での研修を体験して感銘を受けていた頃で、無一物で下座の生活の中で世の中に生かしていただくという教えが東洋的で、MRAよりもいいなという気持ちだったのです。

ただ若い人たちとの討論で、中途半端にとぎれた結果、逆にいつもその問題解決にとりくむことが多くなったことは否めません。

しばらくして、ローマクラブの資料にふれて、当時、30億の人口が世紀末には60億と倍増していく予測から食糧問題の解決などに金融の役割などを行員の研修に取り入れたりしているうちにその解決が容易でないことも分かり、開発途上国との協働、共生など、又、そのための異文化理解、相互コミュニケーションの深耕をいかにするかということに問題意識が変わってきました。

その頃、国鉄を引退しておられた十河元総裁を協力会員としてお訪ねした際、新幹線に生命をかけたが、まだ余力があるので、MRA的にもうひと仕事貢献しようと考えているという情熱にふれ、後日、理事会に九州代表として出席している際、秘書に車椅子で押されて出席なさった同氏の涙ながらの訴えに胸うたれて完全にチェンジしたというのが正直なところです。グローバルな社会の問題解決にはMRAが架け橋になる存在だと気づかされたわけです。

余談になりますが、同じ研修所メンバーの池田宏志氏は現地で体感したいと、銀行を退職し、オイスカ財団で農業を学び直し、フィリピンのミンダナオに渡り、現地に溶けこみながら植樹指導で骨をうずめようと頑張っており、今、現地名誉州民として私よりすばらしい実践をしております。

更に爾来、指導をいただいている相馬雪香先生のひたすらMRAにうちこんでおられる一言一句にいつも炎を燃やす油をいただいているのが、私のチェンジの原動力なのです。

では、私はどうチェンジしたのかをふりかえりますと、柱の一つは、常にグローバルな考え方を基本とするようになりました。

何が正しいかを判断する際の基本が地球上で生活する一員として、もろもろの問題解決にあたるというごくシンプルな考えではあるのですが・・・。

例えば、経済社会は世界的にデフレという懸念が広がっていますが、その解決の手助けに地域通貨（提唱者は日本では加藤敏晴氏他いろいろな方があります）なども役立つため周辺に広めたいなと研究実践している現在です。走り回っている間に、小田原やコーにうかがう機会を逃したりして、残念に存ずること折々ですが・・・。

# 農民会議

## 農民が貧困からぬけ出し、そしてカンボジア経済の力となるために

IC(MRA) Farmers' Dialogue in Cambodia
3 - 4 February 2003

兼松　恵（プノンペンにて）

去る2月3日～4日、カンボジアの首都プノンペンで、ソンサン財団とIC(MRA)との共催で、農民のための会議が開催され、カンボジアの5州より75名の農民の方々を初め、ラナリッド国会議長、農林水産省長官、女性問題・退役軍人省長官、地方開発省長官、政府関係者、シンガポール大使、EU大使、開発系NGO、大学生ら、そして、海外から参加した、オーストラリア、インド、マレーシア、イギリス、ポーランド、ドイツ、フランス、日本のIC(MRA)関係者等を合わせた150人余りが参加しました。

本会議の主催者、ソン・サン財団代表のソン・スベール氏（憲法評議委員会委員）は、歓迎挨拶で、「カンボジアの国民の85％が農民で、しかもその大多数が人間としての尊厳を維持できないような状況があります。もちろん全ての問題を一挙に解決するわけにはいきませんが、クメール人同士の間での社会的階級間格差を緩和し貧困を解消すると共に、人間としての尊厳を保てるような道を見い出すために、このダイアローグが効果的に寄与できることを願って止みません」と述べました。

IC(MRA)オーストラリアのフィル・ジェフリー氏は、次のように述べました。「この国際農民会議（ファーマーズ・ダイアローグ）は、世界中にネットワークを持つIC(MRA)により、これまでにスウェーデン、スイス、アメリカ、ポーランド、東ドイツ、インドで開催され、カンボジアの次にはケニヤで開催されます。世界中の農民の方々が、世界の農業の現状の深刻な諸問題に対し意見を出し合い、より効果的に世界の食料を維持供給するための方策を考えるという大切な役割をになっています。

IC(MRA)はそれぞれの生き方の中で間違っている点を、'内なる心の声'に耳を傾け、良心に従い正していくということを提唱しています。それは例えば、奥さんがあなたのために準備した食事に不平を言ったことを謝ること、又、学校から持ち出した本を返却するといったシンプルな行動を実際にとることから始まるのかも知れません。自分の間違っている点を自ら正すこと、正しくない行動について謝罪をするというのは非常に難しいことかも知れませんが、実際、'内なる心の声'に耳を傾け従って行くと、自分が何をすべきかが明確になり、決断しやすくなります。

これまでのファーマーズ・ダイアローグで討議されてきた課題は、食料の確保・分配・流通、農業に携わる女性の役割、清潔な水、良質な生産物の農民自身による市場の確保、土地の保有権、塩害問題等でしたが、これらの課題は農民に限らず、それぞれの国で生活を営む全ての人々に関わって来る課題です。地球上で人類が共に生きぬいて行くためには、人口の増加に伴う土地の改善と良質な水の確保が必要です。又、人類が必要としているだけの食料を生産するためにも、世界中の農民が情報を分かち合って行くことは必要不可欠です。農民は地の塩です。非常に厳しい条件の土地で作物を栽培し、自国の人々の食料を生産し、又、輸出します。

私はオーストラリアの非常に乾ききった内部地域の出身で、雨量の少ないかんばつにも慣れています。しかし、都市に暮らす人々の農業に関する知識は乏しく、耕作、栽培、収穫等にどのような問題が存在するのかは分りません。いつでも欲しいときに、きれいな健康食品が店先に行けば手に入れられることを当たり前と受け止め

開会式で歓迎の挨拶を述べるソン・スーベル氏

インドのバラスブラマニアン博士を交えての分科会

ています。

農業は国の将来に関わる重要な分野です。事実、農民の在りかたこそ、国が貧困から開放される鍵となります。農業のシステムが非効率的である国は、気候への対応の不足や、貪欲な商人（貿易業者）の言うがままにあやつられるといった大きな問題を抱えている国であることがしばしばです。単に人類を養うというだけではなく、農業の将来を確実にするためのより生産的な道を共に学び、そして働く、という考え方を分ち合える農民こそが重要です。生産の確保のための手段を持った農民を持つ国はより高い生産性を保ち、より良い国への成長へと導きます。農民も都市に暮らす人々の支援が必要です。食料がどこからどの様にして供給されているのか良く認識してもらうことが必要です。カンボジアの農民と消費者のニーズを心にかけ、又世界の消費者と農民について学び合うカンボジアの人々のグループが必要です。それぞれの心の内なる声に耳を傾け、正しくないことがあれば、それらの点を正してゆく人々が必要です。

人類学者のマーガレット・メアドの次の言葉で結びたいと思います。『思慮深く、確信を持った市民の小さなグループが世界を変えていくことに決して疑問を持たないこと。実際それこそが唯一、世界を変えてきたのですから!』

男女を問わず、各地方からの農民たちも闊達に問題提起をして政府の代表者らとの積極的な質疑応答がなされました。分科会では、食料供給の確保、農業における女性の役割、種銀行、融資、協同組合、バイオ農業、IPM（農薬を使わず、薬草などで害虫を退治する方法）、良質な水の確保等について真剣な討議がなされました。全体会議でも、灌漑システムの不整備による洪水とかんばつによる被害、農作物の市場へのアクセスが無いこと、基本的な衛生環境の不在、切実な貧困の中にあって村人同士の間で信頼関係が築かれていないこと、又、家庭内暴力等などについても問題提起の声があがりました。

インドの各地方の農民たちの協同組合の支援もしているバラスブラマニアン博士は、基調講演の中で、インドの村々でどの様に農民たちがイニシアティブをとって自分たちの間で考えを出し合い生産物を市場に結び付けたかを、インドの南部の村で豊富なバナナの繊維を使って紙の生産に成功し、それを又、協同経営の道に結びつけた実例などで紹介されました。

今回のカンボジア農民会議の主催者の一人で、IC（MRA）小田原国際会議にも参加したことのあるヘンモニー・チェンダ氏は、カンボジアの農民の置かれている深刻な現状を取り上げて『政府が変わるのを待っていたら自分達が先に死んでしまうだろう、村の農民達の間でネットワークを築いていくことを学ばなければ、いつになっても市場の確保は出来ない。国を変えて行くには先ず自分達から出来ることを行動に移して行かなければいけない。死につながるような切羽詰まった現状であるからこそ、一人ひとりの志が大切で、同じ志を持つ者同士のネットワークを築いて行くことが必要である」と力強く語りかけました。

昨年7月のマレーシアでのIC（MRA）アジア・太平洋青年会議にカンボジアから参加した大学生たちも、今回の農民会議に参加した農民一人ひとりのお世話をはじめ、全体会議における一人ひとりの決意から社会を変えて行くというテーマでの寸劇や歌の披露、又、分科会での通訳を受け持ったりと大活躍しました。

シソヴァット・チボンモニラック殿下（上院副議長）は

シェムリープ州の食料・農業機構の農業プロジェクトを見学する海外からの会議参加者

閉会式の挨拶の中で、「国の指導者がもっと国民の力になることが問われている」と述べられ、今回の会議の意義深さに言及されると共に、各地方からの農民一人一人を励まされました。

海外からの参加者は会議の前後に二日間ずつ南北4州の地方を訪ね、それぞれの州で農家を訪問しカンボジアの農民の暮らし振りを学ぶと共に、各国でのそれぞれの経験に基づいた活発な意見交換を行いました。

地方訪問最終日にお会いしたメアー博士は、カンボジアで長く続いた悲劇的な紛争が国民に及ぼした心理的影響について話されると共に、これまでの多くのNGOに見られたような、村の外から来て村の人々を指導するというのではなく、今回の農民会議のようなアクションを通して地域社会の意識と仕組みを築いて行くことが如何に重要であるかということを明確に語って下さいました。

カンボジアの国民の85%の人口が貧困に喘ぎ、民主的な社会の実現にはまだ道のりがあるという状況の中で、IC(MRA)の会議が開催されたことは、カンボジアが世界の平和に寄与するためにもとても意義深いことでした。たとえ少数であっても国の将来の為に日々真剣にIC(MRA)の確信を持ってベストを尽くしている政府関係者、NGO、農民、そして学生等、職業や年令等の違いを問わず、かけがえのない人々のネットワークがここカンボジアでも確実に構築されて来ています。

この度のカンボジアでのIC(MRA)農民会議開催のために、日本のIC(MRA)の皆様のお一人おひとりから本当に心温まるご配慮を賜り心より御礼申し上げます。カンボジア、カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、フランスのIC(MRA)関係者の方々と共に、皆様に支えて頂き今回のこの農民会議の開催が実現可能となりました。

困難な状況の中にあってこそ、一層大切な信頼のネットワークが与えられるのかも知れません。その命綱とも云えるネットワークの構築が、日本の皆様の熱い祈りによって実現できたことは、今後のアジアの平和のための貴重な礎石となることでしょう。

希望の種が大地のみならず人々の心にも蒔かれた、かけがえのない国際会議となりましたことをご報告すると共に、皆様の温かなご配慮、ご支援に改めて心よりお礼申し上げます。

今回のカンボジア農民会議の開催に際しましては、カンボジアでのIC(MRA)活動の中心であり、ソン・サン財団代表のソン・スベール氏、及び、会議のお手伝いのためにカンボジアに渡られた兼松恵さんより開催費用(約174万円)の支援要請の手紙を頂きました。IC(MRA)関係者の方々にご協力のお願いを致しましたところ、35口、計60万5千円のご寄付を賜り、カンボジアに送付することができました。

日本の方々の暖かいお心が、このように形になって現れることを本当に嬉しく思うと同時に、世界のIC(MRA)の友人たちと共に、少しなりともカンボジアの今後の国作りのためにお役に立てたことを有り難く思っております。

国際MRA(IC)日本協会名誉会長　相馬　雪香

# ICワールドニュース

## ■ ケニア

最近行われた選挙に向け、クリーン・エレクション・キャンペーン（※）を展開し、10万枚のビラを有権者に配り、買収や暴力に反対することを誓うよう呼び掛けました。又、ラジオやテレビのトークショーや教会、学校等々での集会でもアピールを行いました。又、選挙に先立っては、各コミュニティで清潔で信頼のおけるリーダーが国会議員に立候補できるよう働きかけました。

（ワールド・ブレティン2月号から抄訳）

（※クリーン・エレクション・キャンペーンはオーストラリアのクインーズランド州でIC（MRA）のチームが行ったのをモデルとして、1992年より台湾のIC（MRA）が展開、大きな成果を見ました。その後、ブラジル等でも同様のキャンペーンが行われました。）

## ■アメリカとイギリスのICメンバーがエジプトとレバノンを訪問

去る3月初めに現地のICメンバーの招待によりエジプトとレバノンで2週間を過ごしました。招待してくれたのは、昨年10月にイギリスで開かれたIC世界連絡調整会議の中で「中東の人々とその地域に深く関わるメンバー間で集中的に議論をした」参加者の確信を共有するICメンバーたちです。安全に気をつけるようにと言われましたが、危機の際こそ、人々と会える絶好の時であると信じていました。それは直ぐに立証されました。この両国の素晴らしいICチームとその友人たちの心も家も広く開かれ、伝説的ともいえる中東のもてなしぶりに圧倒されました。この危機的な状況の中で、アメリカ人が耳を傾けに、そして、理解の橋を架けに来てくれたと感謝してくれたようです。エジプトへの訪問には、イギリスのエバリントン夫妻（IC専従）が合流しました。故サダト大統領の未亡人がナイル河畔の自宅に迎えてくれたのを初め、外交官クラブでは、エジプトの初代駐イスラエル大使、アルアザールのグランド・イマムのアドバイザー、スーダンの和平プロセスのためのアラブリーグ（アラブ諸国）大使であるコプト教のクリスチャンの女性等にも会いました。レバノンでは国内各地を訪ねることができました。国の歴史を形作って来た複雑な共同社会の相互の関係について学ぶべきことが多くあります。ICの友人たちがすべての共同社会に接触を図りお互いに心を使いあっているのに感銘しました。レバノンのICの友人たちは、皆それぞれ大きな責任を担っている上、きちんと組織されたICの団体も専従者もありませんが、お互いの為に時間を取り合い、『静かな時間』を共同のアクションを行う上での基礎として、最重要視しているのです。

ディック・ラフィン（アメリカ、IC専従）

（ワールド・ブレティン4月号から抄訳）

## ■ インド

「コー・イニシャティブス・オブ・ビジネス」（CIB）が新しく結成した「アジア、太平洋、アフリカ地域グループ」（APARG）の国際会議が1月9日（木）から12日（日）に掛けてセンターで『グローバリゼーション―受け入れ、機会、創造、協同～アジア・太平洋、アフリカから見たグローバリゼーション～』のテーマで開催され、16ヶ国から170名が参加しました。

（ワールド・ブレティン2月号から抄訳）

## ■『アクション・フォー・ライフ』

将来のIC活動を担っていく青年を育成することを目指して、本年9月より第二回目の『アクション・フォー・ライフ』がインドで開催されます（その後、昨年同様アジア各国を訪ねるフィールド・ワークを実施予定）。

（ワールド・ブレティン4月号から抄訳）

## ■ カンボジア

昨年の7月にマレーシアで開催されたICアジア太平洋青年会議に参加した青年たちが中心となってバッタンバン州（Battambang）に小さなIC(MRA)センターが開設されました。タイとの関係の悪化を踏まえ、タイとカンボジアの学生たちの間でお互いの理解と信頼を築くための勉強会の開催を企画中です。又、来年の7月に予定されているICアジア太平洋青年会議をカンボジアで開催することも検討されています。尚、7月の選挙に向けて、クリーン・エレクション・キャンペーンのリフレット（クメール語版）を印刷中です。

（ワールド・ブレティン5月号から抄訳）

# 事務局便り

## ◆IC広報委員会の設立

2002年12月7日の「総会&年末懇親会」において、橋本会長が、「ICの活動を多くの人々に認知して頂くためには、広報(PR)活動の充実が不可欠である」と強調されたことを受け、2003年1月より元電通パブリックリレーションに勤務されていた佐久間健氏(現在、コミュニケーション戦略研究所主宰)を中心にしたIC広報委員会を設立しました。現在のところ、まずICが広報活動を行う上で必要最低限のプラットフォームを整備しております。主に、

(1)イニシアティブス・オブ・チェンジのキャッチフレーズ"自らの行動でよりよき社会を"の作成

(2)ICウェッブサイト作成(IC&CRTのホームページ)

(3)IC&CRTにおける活動パンフレット作成、

(4) IMAJの編集

(5)プレスインタビュー開催に向けたマスコミ向け説明資料の整備等

といった準備作業を進めております。なおIC広報委員会のメンバー構成は、佐久間健(コミュニケーション戦略研究所主宰)、武山健自(イーシンコミュニケーションズ代表取締役)、羽田次郎(羽田孜事務所秘書)、池間淑恵(会社員)、内田千登勢(フリーランスライター)、國廣昌史(上智大学)、小出壮一(慶應大学)、伊井健太(早稲田大学)、長野清志、石田寛の計10名です。

## ◆ICホームページ

羽田二郎、小出壮一、伊井健太の各氏がボランティアでホームページの作成・更新をしてくれています。是非、ご覧下さい。ホームページアドレス: http://www.initiativesofchange.jp

## ◆フィリップ・クレイグさんの来日

1982年4月から4年半にわたって日本に滞在し日本のICの活動を支援してくれたジェフリー&ヴェロニカ・クレイグご夫妻の長男のフィリップ・クレイグさん(イギリス、シェフィールド大学で日本学を専攻中)が、昨年10月より名古屋大学に留学中です。5才まで日本で過ごし、日本の幼稚園に通っていた頃は見事な日本語を話していました。ご両親に続いて日本とイギリスの掛け橋としての今後の活躍が期待されます。

## ◆相馬雪香名誉会長と日野原重明聖路加国際病院理事長の対談集が発行される

去る2月、毎日新聞社より『明日の日本への贈り物』のタイトルで、91才の年令をものともせず幅広く活躍されておられるお二人の対談集が発行されました。大変素晴らしい内容の本ですので是非ご一読下さい。尚、こちらの事務局でも取り扱いをしておりますのでご所望の方はご連絡下さい。

## ◆次号のIMAJニュース

今号の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。次号では去る6月13日から15日に掛けて開催されました第26回IC小田原国際会議について詳しくご報告致します。

## ◆新事務所

先般皆様にお知らせ致しました様に、去る3月19日に事務所が恵比須より渋谷に移転しました。JR渋谷駅南改札口西出口から徒歩5分ほどのところですので、どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。